

『今月の天候と農作業』

通巻第5704号
10月号
令和7年10月2日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

向こう1か月は気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

8月上旬以降、暖かい空気に覆われ、気温の高い状態が続いています。向こう1か月の気温も、暖かい空気に覆われやすいため、高い状態が続くでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

＜1 週目の予報＞ 10月4日(土)～ 10月10日(金)

天気は数日の周期で変わります。

＜2 週目の予報＞ 10月11(土)～ 10月17日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3 週目から 4 週目の予報＞ 10月18日(土)～ 10月31日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 適期収穫

全籾数の8割程度が黄化した時期を目安に収穫しましょう。また、収量や品質低下を防止するため、早期落水（収穫5日前までの落水）は控えましょう。

2 乾燥調製

乾燥調製作業は品質や食味に大きく影響する大切な作業です。乾燥は、40℃以下の温度で、毎時の水分減少率を0.8%以下とします。仕上げの玄米水分は14.6～15.0%を目安にしましょう。

また、複数の品種を扱う場合は、品種の切替時に、機械や袋等の清掃をこまめに行い、異品種の混入を防止しましょう。

◆大豆

1 排水対策等

大雨や台風に備えて、排水溝を整備するなど、排水対策を徹底しましょう。

2 病虫害防除

カメムシ類は生育後期まで莢を加害します。また、ハスモンヨトウは生育期間全般を通して加害します。ほ場をこまめに観察し、適期防除を行いましょう。

◆ソバ

子実肥大期に入るため、降雨後に停滞水があるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな排水対策を心掛けましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆施設野菜全般

台風等の大雨により施設内に水が流入したときは、速やかに施設外へ排水を行い、作物などに付着した泥を洗い流しましょう。あわせて病害対策（特に軟腐病）とし

て、殺菌剤を散布してください。

◆きゅうり

ハウス抑制裁培は、主枝の収穫期で、側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多めのかん水を行いながら、主枝の摘心が遅れないよう注意しましょう。追肥は、主枝摘心の1週間前に行い、その後は側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用しましょう。

促成栽培は、定植時期となります。早めには場準備を行い、適期に定植しましょう。

◆ピーマン

促成栽培で、第3分枝が強い場合は、側枝のねん枝等を行い、主枝の伸長を促します。また、草勢が弱い場合は、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の整枝管理に努めましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは、定植後の草勢管理のためにかん水量を制限します。かん水の開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるため、第3花房の開花期を目安にかん水を開始してください。また、第1段果房の肥大を見ながら追肥を開始しましょう。

◆いちご

9月上旬の大雨の影響で、定植後に炭そ病の発生が懸念されます。余り苗の管理を継続し、発病株の植え替えに備えましょう。

また、第1次腋花房の分化期となるため、花芽分化を確認後、マルチ被覆を行うとともに、追肥を開始しましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたかんしょは、収穫期になります。生育日数が130日以上になると、芋の形や皮色が悪くなるため、適期に収穫しましょう。また、種芋は基腐病や茎根腐細菌病が発生していないほ場から確保しましょう。

◆さといも

中生種の収穫と翌年の種芋の貯蔵を始める時期です。種芋は掘りとり時まで葉がしっかりした株から採りましょう。葉が枯れたほ場のもの、芽つぶれや乾腐病に罹病した芋は、翌年の種芋として使用しないでください。

◆かんしょやさといも等の収穫後の片付け

翌年の各種病害の発生を抑えるため、収穫が終わったほ場は速やかに片付けましょう。残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分しましょう。ほ場外に持ち出せない残さは、できるだけ地温が高い時期に耕耘し、分解を促進します。また、種芋採取用のほ場等で作業をする時は、病気や線虫の持ち込みを防ぐため、長靴や農機具を洗浄してから使いましょう。

◆ほうれんそう

加工・業務用の播種期です。地力が高く、排水の良いほ場を選定しましょう。播種時に土壌が乾燥している場合は、スプリンクラー等によるかん水を行い、出芽を促します。

◆たまねぎ

翌春に収穫する作型の播種期です。排水の良い苗床を準備しましょう。播種後は籾殻等を苗床に散布し、さらに十分にかん水をして、出芽まで乾燥させないようにしましょう。

(倉永 泰代)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥・かん水と併せて、窒素成分主体の葉面散布を、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

◆完熟きんかん

摘果が終わっていない園では早急に摘果を行い、仕上げ摘果で着果数を調整しましょう。

着果の時期が7月中旬以降で果実の肥大が遅れている園地や、夜温が早く低下する

中山間地域では、果実の肥大を促進するために高めの温度管理が必要です。１０日までにビニル被覆を行い、昼間の温度を２８℃、夜間は外気温よりも３℃程度高い温度を目安に加温しましょう。

◆マンゴー

後期作型の８月に剪定した園では、全体的に新梢の発生や充実が遅れ、花芽の着生が不安定になります。昼夜の温度をやや高く管理したり、葉面散布を複数回行うなどして、新梢の緑化と充実を早めましょう。

近年、果実の軸腐病の発生が増加しています。ハウス内の胞子の密度を下げるため、昇温開始までに枯れ枝を徹底して取り除きましょう。また、炭そ病の対策のためにも、剪定残さ等は全て施設外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

◆秋肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分な場合、翌年の新梢発生や開花・結実が悪くなります。そのため根が活発に活動している１０月末までに施肥を行いましょう。

ただし、不発芽が多く見られるナシ園では、対策として秋冬期の施肥は見送り、春肥で補うようにしましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆花き全般

１０月に入ると夜温が徐々に低下します。低温による降霜被害や生育遅延を防ぐために、施設栽培では暖房機のメンテナンスと早めのダクト設置を行いましょう。

◆キク

秋ギク「神馬」は、定植後に１０℃以下の低温に遭遇すると、幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがあります。早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

また、気温の低下に伴い白さび病が発生しやすくなるため、ハウス内の換気や防除を適切に行いましょう。

◆スイートピー

中、下旬が発蕾期となります。中旬頃までは、摘蕾により株づくりに努め、一定の葉長に達してから着蕾・開花させます。

◆デルフィニウム

中山間地は収穫期、平坦地は中旬頃から発蕾期です。

花のボリューム低下を防ぐために、適切なかん水や施肥を行いましょう。

◆トルコギキョウ

活着不良防止のため定植後しばらくは十分にかん水し、草丈が10cm前後になったらかん水を徐々に控えて根域の発達を促します。

また、生育後半の過剰な施肥はブラスチングの発生要因となるため、発蕾までの期間に適宜追肥を行いましょう。

◆ラナンキュラス

上、中旬は定植の最盛期です。

定植後の株枯れ防止のため、寒冷紗等によりハウス内の温度を下げ、冷蔵中に腐敗が見られた苗は定植しないようにしましょう。また、生育遅延を防止するため、定植初期は十分にかん水し、その後は徐々にかん水を控えて根域の発達を促します。

◆キイチゴ

収穫期です。樹勢の維持並びに翌年春からの萌芽促進のため、株あたり3～5本程度のシュートを残し、それ以外で出荷規格に達したものを順次収穫しましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

県内における野生イノシシの豚熱（CSF）感染事例は、9月25日現在で18例となっており、養豚場へのウイルス侵入リスクが非常に高い状況が続いています。また、鳥インフルエンザは過去10月に国内で発生した事例があり、警戒を高める時期にきています。

農場の防護柵や防鳥ネットに隙間や破損がないかを再点検し、野生動物や野鳥の侵

入を防ぎましょう。また、日頃から健康観察をしっかり行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜

朝夕と日中の寒暖差が大きくなる時期です。幼畜（子牛、子豚、幼雛）は、温度変化に特に弱いため、風が直接体に当たらないよう、板などで幼畜の側面3方向を囲い、電熱ヒーター等で保温しましょう。合わせて、晴天日の昼間は換気を行いましょう。

特に、3ヶ月齢頃までの子牛は冬場の低温に弱く、腹部が濡れた状態のままでは風邪や下痢などの疾病にかかりやすくなります。その後の発育に悪影響を及ぼす可能性がありますので、敷料をこまめに取り替え、衛生的で暖かい状態を保つようにしましょう。

◆飼料作物

飼料用イネや、飼料用トウモロコシなどの春夏作は続々と収穫時期を迎えています。良質なサイレージを調整するためには、乳酸菌が働きやすい環境を作ることが重要です。収穫適期である黄熟期での刈り取り、適度な水分量（50%程度）での梱包、梱包時は密封状態にすること、を意識しましょう。

また、出来上がったサイレージは、給与するまで密封状態が保たれるよう、適切に保管しましょう。

また、イタリアンライグラス等の秋冬作の作付けも始まります。播種前には土壌分析の結果に基づき施肥設計を行い、適切な肥培管理を心がけましょう。

（長瀬 朋子）

特用作物

◆茶

Ⅰ 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて芽揃いが良く、摘採が3日程早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすくなります。そのため、防霜施設の有無や茶園の立地条件と品種の早晩生等を考慮して実施しましょう。

①整枝の時期

整枝は、平均気温が18度以下となる頃を目安に、山間地域は10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃に実施しましょう。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例が見られますが、30cm²内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響は心配ありません。一方、秋整枝が遅れると越冬芽の充実不足となり、収量・品質に影響が出てくるため、適期を逃さないよう注意してください。

②整枝の高さ

整枝は、最終摘採・整枝面から3～5節上で、葉層を8cm以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より1～2節高い位置で実施しましょう。

2 病虫害の防除

チャトゲコナジラミ発生地域では、成虫の発生が終息した後にやや深めに裾刈りを実施しましょう。更に、冬期防除（マシン油）を行い、チャトゲコナジラミとカンザワハダニの越冬密度の低減を図りましょう。

（新 正仙）

◆しいたけ

1 水分管理と環境整備

9～10月中旬は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。水分を多く含んだほだ木は丈夫な原基をたくさん作り、しいたけの発生量に大きく影響しますので、降雨状況に気をつけながら、ほだ場の湿度を適当に保つように努めましょう。

また、しいたけ発生量の増大や品質向上のため、暗くなったほだ場は、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度紅葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件（日照、標高等）によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、必要であれば事前に下刈りを実施するなど、伐採に向けた準備を始めましょう。

（奥野 慧）

関連情報

◆秋の農作業安全確認運動

9月1日から10月31日までの2ヶ月間は秋の農作業安全確認運動実施期間です。

全国では、毎年約250名の方が農作業事故で亡くなっており、本県でも令和5年に6名、令和6年に6名の尊い命が失われています。

農作業死亡事故の中でも、農業機械作業による事故が最も多く、農作業死亡事故全体の約6割を占めています。機械に乗るときは、必ずシートベルトやヘルメットを着用しましょう。また、事故が起きた場合に備え、作業はなるべく2人以上で行い、万が一一人で作業する場合は、必ず携帯電話を所持してください。

◆農作業安全

機械作業や高所での作業を行う場合には、機械や脚立の乗り降り時は足元に注意しましょう。

また、作業時には、必ずヘルメットを着用し、転落や転倒によるケガを防止しましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後は、必ず散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆気象災害対策

台風や大雨等、気象災害への備えが必要な時期です。宮崎農業気象WEBSERVICE（ウェブサービス）では、様々な気象災害に対する対応策をわかりやすく掲載しています。農作業の参考にしてください。

<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp/>

（農業普及技術課）

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害

の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ タバコガ オオタバコガ	並 やや多 やや多	フェロモントラップ調査で、タバコガ、オオタバコガの発生が多くなっています。チョウ目害虫は老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場を定期的に見回り、早期発見と若齢期の防除に努めましょう。 施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
	施設野菜全般	土壌病害虫	— 台風等による大雨では場が冠水した場合は、土壌消毒の効果が低下するため、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生するおそれがあります。排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行いましょう。
トマト・ミニトマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	TYLCV と CCYV はタバココナジラミ、MYSV はミナミキイロアザミウマによって媒介されるため、施設開口部には必ず防虫ネット(目合い 0.4mm 以下)を設置し、侵入を防止しましょう。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいため、発生初期の防除が重要です。 また、発病株は伝染源になるため、必ず抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分しましょう。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)	—	
ピーマン	ヒラズハナアザミウマ	—	近年、発生量の多い状況が続いています。本虫は花の内部に生息するため、多発してからの薬剤防除は非常に困難です。本虫に対して土着天敵のタバコカスミカメの利用が有効であるため、スワルスキーカブリダニと体系的に利用しましょう。
促成いちご	炭疽病、萎黄病	—	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ほに病害虫を持ち込まないよう注意しましょう。
	その他の病害虫	—	
果樹全般	チャバネオカメムシ ツヤアオカメムシ	—	県内 5 か所に設置した予察灯への直近 1 か月の誘殺数は、チャバネオオカメムシでは平年並、ツヤアオカメムシでは平年よりやや少の状況ですが、チャバネオオカメムシでは、一部で誘殺数の増加がみられます。果樹カメムシ類は地域や時期によって発生量が大きく変動するため、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めましょう。
カンキツ類	黒点病	やや少	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても 1 か月毎の防除を行いましょう。 ミカンハダニは生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないため、発生初期(寄生葉率 30%、または 1 葉当り虫数 0.5~1 頭程度)に防除しましょう。収穫前の早生みかん等では、農薬の収穫前使用日数に注意しましょう。
	ミカンハダニ	やや少	
茶	カンザワハダニ	並	カンザワハダニの防除適期は越冬前の 10 月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断しましょう。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統薬剤の連用は避けてください。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は成木園で 10a 当たり 1,000 リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるように丁寧に散布しましょう。
	クワシロカイガラムシ	並	
1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。			
2) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください			

